

### 1. 現代をどう見るか

(1) 無縁社会＝地縁・血縁から成る社会ではなくなった（NHK 放送より）

Cf. 地縁・血縁から成る社会

- ・共通の慣習・道徳をもつ
- ・共通の宗教的基盤をもつ

(2) 地縁・血縁がないことよりも、共通の考え方、慣習、道徳がないことが問題

※「価値観の多様化」「規範意識の低下」といった現象は、地縁・血縁から成る社会から、個人を基盤とした社会への移行を示しているのではないか。

※地縁・血縁に代わる何かが必要

＝新しい人間結合の論理

＝自由？平等？博愛？正義？・・・

### 2. ペスタロッチーの課題

- ・スイス社会の構造変化
- ・農村から都市への人口流入・・・工業化の進展
- ・人々をつなぐ紐帯がなくなった

※問題構造は同じでは？

→家族愛が新しい人間結合の論理になりうる？

### 3. ペスタロッチーにおける子育て論

(1) 子育ては政治経済と無関係ではないが、相対的自律性も持つ

ペスタロッチーは、絶対主義体制から近代市民社会への政治的変革、そしてマニュファクチャーから近代資本主義への経済的変革の時代に生きた。教育は政治経済の変動と無関係ではないが、一方で相対的自律性を持つ。換言すれば、政治的経済的変動に敏感である必要があるとともに、その中で「人間教育」の独自性を確保する必要がある。ペスタロッチーにとって、「政治のはじまりと終わりは教育」なのである。ペスタロッチーの観点からすれば、現代の子育ても、政治経済のグローバル化の中で、いかに民族の独立や個人の尊厳を保つかといった課題の中で捉える必要があるだろう。

(2) 子育ての原点として家庭を重視

#### ①家庭の自然な人間関係—個人としての人間の育成—

家庭の自然な人間関係が、すべての原点である。ペスタロッチーによれば、「満足している乳飲み子は、この道において、母が彼にとって何であるかを知っている。しかも母は幼児が義務とか感謝とかいう音声も出せないうちに、感謝の本質たる愛を乳飲み子の心に形作る。そして父親の与えるパンを食べ、父親とともにいろりで身を暖める息子は、この自然の道において、子どもとしての義務のうちに、彼の生涯の浄福をみつける」（『隠者の夕暮』）。子どもの自

己保存の欲求を満たし、子どもに満足を与える親の行為が、人間教育の基礎である愛、感謝、信頼の感情ならびに従順の能力を育むと考えられる。

## ②家庭から地域社会への広がり

家庭においては、まず子どもたちの自然的欲求を満たすことが、子どもたちのなかに父親や母親に対する感謝の感情を呼び起こし、それが父親や母親への愛情へと発達する。同胞愛は、はじめは母親を喜ばせたいという感情からはじまり、父親、兄弟姉妹、祖父母、親戚等へと広がる。こうした原初的な感情は、親や家族を媒介として、近隣に広がっていくと考えられる。それにより、家庭的雰囲気を持った地域社会が形成されていく可能性が示唆される。

## (3) 学校の家庭化

### ①愛・感謝・信頼、従順をキーワードとした家庭的雰囲気—シュタンツ孤児院での実践—

シュタンツ孤児院では、ペスタロッチーはまず、教師と子どもとの間に家庭的な人間関係が形成されることが重要であると考えた。有名な一節をあげる。

「私は子どもたちとともに泣き、子どもたちとともに笑いました。彼らは世界も忘れ、シュタンツも忘れて、私のもとにおり、私もまた彼らのもとにいました。彼らの食べものは私の食べ物であり、彼らの飲みものは私の飲みものでした。私は何ひとつ持っていませんでした。私のまわりには、家庭もなく、友もなく、召使もなく、ただ子どもたちだけがいました。彼らが健康なときは、私は彼らのまん中にいましたし、彼らが病気のときは、私は彼らの傍らにいました。私は彼らのまん中で眠りました。夜は私がいちばん遅くベッドにはいり、朝はいちばん早く起きました。」（『シュタンツだより』）

ペスタロッチーは自分のことを「お父さん」と呼ばせ、子どもとの間を親子のような関係にした。そして、子どもたちに善悪や正義について考えさせた。

「子どもたちよ、おまえたちは家にいたときよりも、よい食事をしてはいないのか、この私に話してごらん。おまえたちは、自分でどんなに一生懸命働いたとしても、毎日食べ慣れているものを、将来にわたり買って支払うことなんかできないとわかっていながら、ぜいたくに食べさせてもらうのが果していいことなのか、よく考えて話してごらん。それとも、おまえたちにはどうしても必要なものが不足しているのかね、よく考えて話してごらん。私がおまえたちには、これ以上賢明にまた公平にしてやれると思うかね、話してごらん。私のもっているお金で、いまおまえたちが見ているように、70人から80人の子どもたちを養うことができるのに、わずか30人ないし40人だけの世話だけにして欲しいというのかい。それは正しいことだろうか。」（『シュタンツだより』）

### ②規律ある生活—義務と責任—

80数名の能力も年齢も不揃いの子どもたちを教えるために、ペスタロッチーは子どもたちに規律を求めなければならなかった。

「私はなかんずく冗談に、子どもたちが私の範唱したことを復唱しているあいだ、じっと自分たちの親指を見つめているように要求してみた。このようなちょっとしたことでもきちんと守らせることが、教育者にとって、大きな目的を達成するための基礎として、どんなに大切な

ものであるかは、信じられないほどである。」（『シュタンツだより』）

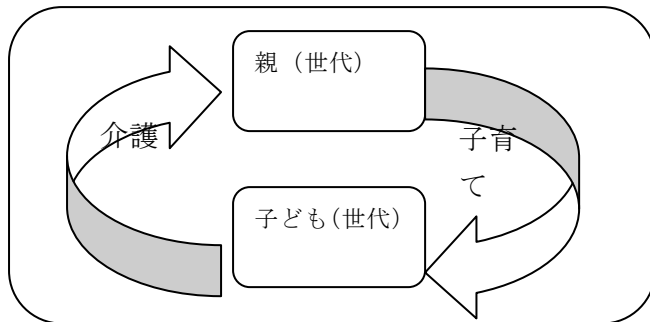
「粗野な女の子であっても、長時間身体と頭とを真直ぐにし、眼をきょろきょろさせない習慣がつくと、ただそれだけでもう道徳的な陶冶への第一歩を踏みだしているわけだが、これは自分で経験してみなければ、誰も信じてはくれないだろう。」（『シュタンツだより』）

これらの訓練は、規律に従うことではなく、規律ある生活を通して、社会に生きる一員としての義務・権利の意識を育てていくことを目的としている。社会の一員としての自覚は、同朋のために役立ちたいという意識となり、子どもたちの学習意欲へとつながっていくと考えられる。それにより同朋のために、次世代のために役立つとする子どもたちが、育成されていくと考えられる。ここから、子育てを核とした、世代間循環型社会が示唆される。

#### 4. まとめ

- (1) 子育て論は、社会との関連で捉えられる必要がある。
- (2) 子育ての目的は、親子のかかわりという狭い関係においてではなく、広い社会関係という空間軸、永遠性という時間軸において捉える必要がある。
- (3) 子育てを核とした、新しい社会関係構築の可能性を探ることができるのではないか。  
＝地縁・血縁ではない家庭的共同体構築の可能性

【イメージ図】



※従来、家庭内で行われていた私事としての子育てを核として、世代間を循環する社会構造。  
※子育ては必ずしなければならないことなので、これを核として構成することで、循環の流れが明確になる。